

普及活動情勢報告（平成 30 年 3 月分）

中央東農業振興センター嶺北農業改良普及所

新たな仲間を募って ～シシトウの新規栽培者講習会を開催～

シシトウを作ってみませんか？

- ・軽いので、高齢者でも扱いやすい。
- ・雨よけ、露地どちらでも栽培できる。
- ・1a(100㎡)あたりの栽培本数は約70株。1株あたりの販売価が1万円に達する農家もいる！
- ・100g(1パック)の販売単価は平均100円と高単価。
- ・嶺北地域の露地栽培での平均面積は2.1a.2人。



現地検討会や講習会を頻繁に開催し、生産者同士の交流も盛ん！

JA 広報誌を活用して、
新規栽培者を募集

2月15日、JA 土佐れいほくシシトウ部会は、大豊町農工センターと普及所の2ヶ所で新規栽培希望者を対象とした講習会を開催し、2人が参加しました。普及所からは、露地栽培での基本的な栽培管理や部会活動について説明しました。参加者からは「一年の栽培管理の流れが分かって良かった。まずは100本定植してシシトウ栽培に取り組みたい」という声が聞かれ、新たに1人が部会に加わるようになりました。

普及所は、今後も JA と協力して新規栽培者の掘りおこしや生産の安定を支援します。

GAPの作付け前点検



GAP へ誘導する担当者

2月27日、JA 土佐れいほく園芸部総会が JA 本所で開催され、部員41人が参加しました。園芸部では、「れいほく版 ISO」から国のガイドラインに準拠した高知県GAPに移行することを決定しました。普及所は「作付け前のチェックシート」を説明し、リスクを減らすGAPの取組を紹介しました。

部会員からは、チェックシートを点検しながら、「ISOで実践してきたことと同じだ」という声が聞かれました。

普及所では栽培期間中や栽培終了後の点検を支援し、県版GAPに基づいた食品安全、環境保全、労働安全に取り組んでいます。

施肥・灌水管理を見直そう！ ～JA 園芸部で講演会を開催～



もう一度確認、土壌の仕組み
「よけあるものは、いらんきね」

2月27日、JA 土佐れいほく園芸部シンポジウム研修会が JA 本所で開催され、生産者、関係機関等58人が参加しました。高知県環境農業推進課から安岡専門技術員を講師に迎え、「野菜・花きの生理障害対策」について学びました。

土壌や生理障害が発生する仕組みについて、丁寧な説明があり、「土壌の実態を知って、日頃の施肥・灌水管理を見直すことが重要だ」ということが再認識されました。

普及所では、今回の研修を活かし、生産者とともに施肥・灌水管理を見直し、収量アップにむけて取り組んでいきます。

視察者に大好評だった現地研修の裏側で頑張りました～家畜防疫について学ぶ～



意外に知らない家畜防疫について学ぶ

3月1日、普及所で中央家畜保健衛生所嶺北支所の濱崎獣医師を講師に迎え、普及所職員10人が参加し、職場研修を行いました。

「農場視察受入における防疫対策の一考察」と題し、10月に開催された全国農業担い手サミットinこうちの畜産農家における視察受入について発表がありました。

平成29年度中国四国ブロック家畜保健衛生業績発表会高知県代表に選ばれた発表で、普及所と連携し、防疫を担保しながら農場視察を受け入れるための工夫や課題について、示唆に富む話を聞くことができました。

職員からは、「たとえ経営主の了解があっても、防疫上は農場内(衛生管理区域内)への立入りは防護服等の着用が必須であるとは知らなかった」などの声がありました。

普及所は今後お互いの業務を理解し、共に連携して高知県の農業振興に取り組みます。

(株) れいほく未来の経営の安定・拡大を目指して！！



問題や課題を明確にし具体的な改善策を協議

(株) れいほく未来の経営強化を目指し、3月2日に今年度最後の第7回検討会を普及所で開催し、社員3人と普及職員5人が出席しました。

会では今年度の園芸販売実績や来年度の品目毎の栽培予定面積を確認し、それに基づく出荷量や販売目標額を協議しました。また、品目毎の経営収支を明らかにするため、生産に係る経費についても各担当で記帳していくことになりました。

同社ではここ1年、雇用を通じて独立就農する研修生が数名出たので、来年度は労働力減に見合った品目の集約やチーム制による新たな体制で、目標達成にむけ取り組んでいくことになりました。

普及所は、引き続き研修生の募集や職員の栽培管理技術の向上、経営改善にむけ、重点的に支援していきます。

JA営農指導員と塩類集積や土壌病虫害対策について協議



ライムギの生育状況を確認

3月5日、JA土佐れいほく営農指導員と普及所が組織する営農連絡会の13人は、大豊町の緑肥(チャガラシ、ライムギ)の実証ほを確認し、塩類集積や土壌病虫害の対応策について協議しました。

普及所からは緑肥の生育状況や土壌還元消毒の実証結果を報告し、対応策を実施する体制づくりについて提案しました。

参加者から「青枯病菌は湛水すると深層に移動するので、残肥を緑肥に吸収させて、太陽熱消毒を実施する対策も考えられる」という意見が出されました。

普及所では実証結果を基に、栽培品目や病虫害に応じた対応策のマニュアルを作成する予定です。

有機農産物の有利販売にむけて ～「大豊とまと」が流通・販売調査を実施～



有機農産物の販売状況を聞き取るメンバー

大豊町の有機栽培トマト農家を中心に組織された「大豊とまと」4人は、3月7、8日に東京・千葉で開催された展示商談会と有機農産物販売店舗等3社を訪問し、有機農産物の販売状況を調査しました。

普及所では、県東京事務所担当者と連携し、調査店舗を選定し、日程調整等を行いました。

農家からは「訪問した販売店等は大手ということもあり、取引には安定した生産量の確保が重要である。生産量を拡大して、組織での取引も検討したい」等の声がありました。

今後、組織の報告会を開催し、情報共有する予定です。

土壌病害を低減させる低温期での土壌還元消毒について



普及所からの指導に耳を傾ける生産者

嶺北地域では多くの品目で土壌病害の発生が問題となっていますが、夏秋栽培のため、栽培が終了した冬期に土壌消毒を実施する必要があります。

そこで、生産者2人は昨年12月から土壌還元消毒を実施し、3月上旬に終了したことから、普及所では低温期での効果を把握するため、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構に協力を要請して、土壌中の病原菌数の変化を調査する予定です。

生産者からは「低温期での効果をぜひ明らかにしてほしい」という声が聞かれ、技術の確立にむけて今後も調査していきます。

こうすれば楽になる ～ユズの低樹高仕立てを現地指導～



幼木の誘引方法を指導

3月6日～16日にかけて、大豊町と土佐町の現地ほ場5カ所で、せん定講習会を開催しました。

参加者は延べ35人で、整枝・せん定の目的や具体的な手順などを説明した後、幼木の誘引や成木の不要枝の整理方法などを実演しました。

高齢化に加え、急傾斜の園地が大半を占めているため、これまで安全で省力的な管理ができる低樹高仕立てを指導してきた結果、農家から「収量は少し減るが、作業がずいぶん楽になった」などの声が多く聞かれ、ようやくその成果がでできました。

今後は、青果生産に取り組む農家を重点対象に、引き続き個別指導を徹底していきます。